

2017年9月、NHKで「食べものに困らなくなる」と人生が変わる」というテーマを取り上げていました。

年間に何万トンと廃棄されるフードロス。この捨てられるはずだった食べ物を、失業や病気などで経済的に困っている人たちに届ける「食糧支援」の特集です。

### ■劇的に変化した働く場

リーマン・ブラザーズ・ホールディングスが経営破綻した2008年、日本も企業の業績悪化が相次ぎ、たくさんの方の失業者がでました。

仕事も住む所もなくした人たちが、日比谷公園に集まった年越し派遣村を覚えているでしょうか。

戦後の高度経済成長を支えた終身雇用制度は昔の話。働く場は、年々非正規雇用が増えています。

世界的には「労働は貧困を減らす」というデータもありますが、日本は、ひとり親家庭、シングルマザーの家庭の相対的貧困率が高くなっています。

2012年、日本の子どもの6人に一人が貧困状態であることがわかりました。

そして、2014年の時点には、厚生労働省の被保護者調査で日本の人口の約1.7%、100人に2人ほどが、生きるために援助を必要としていることが明らかになりました。

### ■生活困窮者自立支援法の制定

ところがこの数年は、健康を維持するのに必要な食事も事欠く「みえない貧困」と呼ばれる人たちがその何倍以上も存在することがわかってきました。

1万人以上と言われる、生活保護を受ける手前の人たちを支援する目的で「生活困窮者自立支援法」が作られ、自治体は相談窓口を置いています。

鶴ヶ島市の相談窓口は、生活サポートセンターです。鶴ヶ島市から委託された鶴ヶ島市社会福祉協議会の事業で、市役所6階にあります。

生活サポートセンターでは、寄付された食品を何日分かの食事として提供しています。

食品の提供は、ひと月に10組を超えることではないということでしたが、手持ちの食品が足りないときは、特定非営利法人セカンドハーベストジャパンからいただいているそうです。

前述のテレビ番組の中で、生活にゆとりがでて、就職活動に専念できたので、希望の正社員の仕事に就けた男性の話は象徴的だと思いました。

また、お腹を空かせ、次第に気力を失い、学校に通わなくなっていたお子さんが、元氣を取り戻して無料の学習支援教室に行くようになった話からも、食料支援を受けて食生活が安定すると、就労や学習支援につながっていくことが伝わってきました。

### ■フードドライブのすすめ

一昨年12月に、栗林知絵子さんから子ども食堂の話をお聞きしました。昨年6月には藤田孝典さんから下流老人の話をお聞きしました。

お二人とも話の節々で「孤立しない、させない」ことに焦点を当てていました。

私たちは、自分たちにできることから始めようと、生活クラブ生協、ワーカースコレクティブa・nと一緒にドライブに取り組みました。私たちの届けた食品も誰かの応援になっていると思います。

食品なので長い間置けくわけにはいきませんが、私たちの他にもフードドライブの取り組みが広がり、あまり間を置かずサポートセンターに食品が届くというのではと考えて続けていきます。



お腹がペコペコでは何も始まらない  
フードドライブでできること



あなたの声を  
お寄せください。

私たちは、日々の生活で気づいた疑問を出し合い、調べ、市政に提案する活動をしています。  
あなたの声と参加が、まちをつくります。  
市民ネットワーク鶴ヶ島に、ご意見をお寄せください。

メール [tsurunetorg@gmail.com](mailto:tsurunetorg@gmail.com)  
FAX 049-285-3504

### ●市民ネットワーク3つのルール

1. 議員(代理人)はローテーション

2. 議員報酬は市民のための活動に活用します

3. 選挙はカンパとボランティアで行います